

フォーラム

ブラジル（サッカー）は敗れたのか？

市之瀬 敦（上智大学外国語学部教授）

いま目の前で起こっていることが現実とは思えない。現実であってほしくない。現実であるはずがない。自分は今すぐこの悪い夢から目覚め、本当の現実に戻れるはずだと思いたくなる瞬間というものがある。2014年7月8日夕方5時（日本時間では9日朝5時）にキックオフの笛が吹かれたワールドカップ・ブラジル大会準決勝で、強豪ドイツと対戦したカナリア軍団ことブラジル代表は、7対1というサッカーとは思えないスコアで敗れ去ろうとしていた。

ミネイロン・スタジアムで現地観戦していた者も、ソファに腰かけテレビ観戦していた者も、美しくかつ楽しくあるべきブラジルサッカーを愛する者なら誰もが、この世の終わりは大げさにしても、大きな絶望感を味わっていたはずである。試合後、ブラジルのある大手メディアは「Vexame!」（屈辱）という一語で惨敗を表現した。確かに二度と忘れることのできない辱めを受けることになった。país de futebol（サッカーの国）としてのプライドは粉々に打ち砕かれてしまった。どんなに涙を流しても、ありえない大差がついた試合結果を記憶から消し去ってはくれないだろう。

ブラジルが初めてワールドカップを地元で開催したのは1950年のこと。第二次世界大戦で被害を受けた欧州の地では不可能だった大イベントを引き受けた。満を持して臨んだホームでの第4回ワールドカップ。最終戦で宿敵ウルグアイに逆転負けを喫し、誰もが確実と思った優勝を目の前で逃してしまった。ブラジル（サッカー）史上最大の悲劇と呼ばれる「マラカナッソ（Maracanazo）」という一語はサッカーファンなら一度は耳にしたことがあるだろう。そして今度は「ミネイロンの悲劇」こと「ミネイラッソ（Mineirazo）」が加わる。この語も辞書には掲載されずとも、ブラジル人の心奥深くに登録されることになるに違いない。

とはいえ、ブラジルサッカーの未来に関して、私はさほど悲観視していない。ブラジル大会のテレビ放映に使われたFIFA公認アニメに出てきたアフリカ系少年を覚えているだろうか。彼は、おそらく貧しさゆえに観戦用チケットを入手できなかっただろう（そこに人種や経済格差の問題をみることは可能だ）。今やワールドカップ観戦はエリートの娯楽なのだ。しかし、少年はリオデジャネイロのファベラからマラカナン・スタジアムを見下ろしながら、1950年大会の挫折の後、ブラジルに栄光をもたらすことを誓ったと伝えられるベレ少年のように、いつの日か自分がエクサ（6度目の優勝）の中心選手になると心に誓ったはずなのである。彼は雪辱を期す無数のサッカー少年の1人にすぎない。

大会前、私はあるサッカー専門誌のアンケートに答え、ブラジル大会の注目点2つを指摘した。ひとつは64年前の「マラカナンの悲劇」を払しょくするような勝利を得ることができるか否か。今ひとつはワールドカップという世界最大規模のスポーツイベントの運営を成功させ、近代国家としての顔をブラジルが海外に示すことができるかどうか。いうまでもなく最初の方は失敗に終わったが、後者は肯定的にみてもよいのではないか。およそ1カ月間の大会期間中、大きな事故・事件もなく、懸念されたスタジアムの建設もなんとか開幕に間に合った（工事期間中に死者が出てしまったのは極めて残念であったが）。交通機関のストライキもトラブルもなく、さらにデモ隊による激しい抗議行動も沈静化していった。何よりもブラジル人のホスピタリティーによって、外国人サポーターは楽しく応援できたのである。つまり、2014年のブラジル代表は一敗地にまみれたのかもしれないが、ブラジルという国が敗れてしまったわけではないのである。むしろ国としてのブラジルは勝利を誇ってよいのではないか。この20年間ほどで築き上げてきた「大国」としての自信に傷がつくこともなかった。2016年のリオ五輪成功に向けての展望も開けてきたと考えてよさそうである。